

---

# SONG

日下部利巳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SONG

### 【Nコード】

N7372Y

### 【作者名】

日下部利巳

### 【あらすじ】

会場に駆けつけた快斗は途方に暮れた。哀に止められていた事態になっていたからだ。哀が与えたキーワードは「新一を酔わすな」「酔わせたら歌わせるな」「大勢の人の前で歌わせたら後悔する」既に新一は酔っぱらっている。どうする？快斗。

(前書き)

ボーイズラブとタグがありますが、ボーイズラブっぽくないかも。  
でも同棲(新一曰く『ハウスシェアだっ!』)してるからボーイズラブかな？

おめでたい空気が充満している会場で何とか人ごみをかき分けて新一を見つけた時、快斗は瞬間天に向かつて十字を切ってしまった。ほんの少し前、彼の主治医である少女から受けた忠告を思い出して頭が痛くなってきたのだ。

「あら、一人？珍しいわね」

居間で雑誌をめくっていたら赤毛の少女が入ってきた。

「ドクターこそ。どうしたの？」

「博士が風邪を引いて熱が出てね。氷が間に合わなくなってきたから氷を貰いに来たのよ」

と、手に持ったボウルを掲げた。

新一と違い、幼い子供でいることを選んだ哀は阿笠が望んだ学生生活を送っている。

学生生活もつぱら研究に精を出している哀だが、本人曰く「学生2、研究3、博士の世話2」だそうである。

頭の中でひいふうみと計算した快斗が「残りの3は？」と聞いたところ無言で見つめられた。しかも微笑付きで。何気に怖かった。

「それで？彼はどうしたの？」

冷凍室を開けながら哀はこの家の居候兼主夫に問い掛けた。

「大学の先生の結婚披露宴の二次会に呼ばれてね。渋々出かけてきたよ」

「それこそ珍しいわね。事件と推理小説の新刊の為以外には一步も動かない人が」

キッチンからクスクスと忍び笑いが聞こえてきた。

「そ　　。大変だったんだから。何でこんな時に限って事件が

起らないんだ、とか。なんであんな処行かなきゃなんねえーんだ、  
って愚痴をこぼして」

「でも行ったって事はその人よっぽど重要な人なのね」

「うん、レポートの時とかに良くお世話になったんだって。教え方が  
凄く上手いって新一にしては珍しく誉めててね。まあ、その人の  
門出なんだから祝いに行かない訳にもいかないでしょ」

「そうね」

「ま、歌わなければいいんだし」

ガシャ  
ン

「ど、どうしたの？哀ちゃん!？」

慌ててキツチンに飛び込んできた快斗に哀はボウルを落した格好  
のまま顔だけ振り返る。

「……………今、何って言ったの？」

「……………？』どうしたの？哀ちゃん』って」

「その前よ!』歌う』って言ってたわよね。何か歌を歌わなきゃい  
けない様な処に彼は行ったの？」

「ああ、新郎新婦の逢いってカラオケサークルなんだって。だから  
カラオケのイベントが盛り沢山用意されてるから、行きたくない  
って散々駄々こねてたよ」

「二次会ってアルコールがでるのよね……」

「そうだね」

「二次会って沢山人が集まるのよね……」

「そうだね」

黒羽君、と哀が寄ってきて

「悪い事言わないから、酔っぱらった彼に絶対歌わせてはダメよ」  
がしつと腕を捕まえて快斗の顔を仰ぎ見る。

黒の組織を壊滅し、APT-X4869の解毒剤を完成させてからも哀は常に冷静だった。だから、こんなに慌てた彼女を快斗は初めてみた。

「新一ってそんなに音痴が酷かったっけ？」

実は新一が歌を歌うのを快斗は数回しか聞いたことがない。

しかもそれは新一が歌うのを嫌がる為ワンフレーズづつしか耳にしたことがないのだ。

「とにかく、人前で歌わせない事よ。歌わせたら……」

「……」

この館の主人の為なら何をしでかすか皆目検討がつかない彼女の慌て様を見て鳥肌が立った。

そんな快斗に哀は据わった目で止めをさした。

「絶対、後悔する事になるわよ」

って言われたのになぁ……………

責付かれて二次会会場に駆けつけてみれば、こんな事態になっていた。

新一は集中出来なくなるのを避ける為、人が大勢いる処ではアルコールを取るのを控えていたから多分大丈夫だろうと、高を括つていたさつきまでの自分が憎たらしい。

目の前にはちよっぴり頬を紅く染めた探偵が出来上がっていた。普段の彼を見ていない人間なら、彼が酔っているとは判らないけれど 明らかに酔っぱらっている。

いつもに比べて瞳がとろんとしているし、何よりいつもより饒舌になっている。

これがかなり曲者だ。

話の流れに間違いもなく、淀みなく喋る人間が酔っぱらっているなどとは一見の付き合いの人間には判りにくい。

彼の場合、酔いが回ってくる程気分良く喋り続けるので始末に終えない。

これに何度騙された事が……

喋りに喋ってキャパを越えたら突然バッテリーが切れたかの様に昏倒するのだ。

初めてこれを見た時、快斗は酔いも一気に冷めて血の気が引いた。

「新一」

「あ、快斗。どうしたんだ？」

とろんとした瞳で問い掛けられる。

これだけでもあまり一目に人目に触れさせたくない。

こういうのをナンとか馬鹿って言うのだろうけれど、どんな新一年でも可愛いくってしょうがない。

「帰ろう。ドクターからストップがかかってるから」

一緒に喋っていた男性（多分これが某助教授なのだろう）がやはり出来上がった顔で心配そうに問い掛ける。

「工藤君、医者さんにかかってるんだ」

「いや、ドクターって言うのには少々語弊がありまして、」

やっぱり酔っている。

快斗の焦りを他所に周りは大いに盛り上がっている。ひょっとして会場内で素面なのは自分だけかもしれない。そう考えるとちよっ



ぴり虚しい。

本来サービス精神大盛な快斗はこんな場は血が騒ぐ。それが、何が悲しくてこんな大宴会を無視して素面でいなければならぬのか。この様子からいくと主賓に勧められて新一も断わり切れずに酒の量を重ねていったのだろう。

「新一、危ないよ。もう帰った方がいいよ」

「何だと」。俺は酔っぱらってないぞー」

「ハイハイ。派出所に連行される酔っ払いのおじさん達が殆どそう言います」

そう言っって快斗は妖しい足取りの新一を引つ張り会場を後にした。

\* \* \* \* \*

少し酔いをさます為、途中通った米花公園で休む事にした。明るさの割に人影はなく、けれどもどこからか音が聴こえるから誰かがラジカセか何かを持ち込んで聞いているのだろう。

「ほら、新一」

「ん。風が気持ちいい」

ベンチに腰かけ、体を休める新一を視界に収めながら、ふいに彼の幼馴染みとの会話を思い出した。

「黒羽君って新一の歌聞いた事がある？」

「うん、ちよっとだけ」

月影島においては、燃え盛る炎越しに微かに聞こえるピアノの音階を見事に聞き分けるといふ、絶対音感の持ち主の様な非凡な事をしでかしてくれたという。その彼が、音痴だと言ふ事がどうしても信じられず、無理を言つて歌つてもらつた事がある。

……確かに、本人が言うだけあつて、上手だとはあまり……とて  
も言えない。

「凄いでしょ。あの音低の悪さ」

「あはは、そうだねえ」

酷い言われようだが、こればかりはフォローのしようがなかった。

「でも、」

苦笑いをする快斗に蘭は厳しい顔付きでにじり寄る。

哀もそうだが、まったくどうして新一の周りには迫力のある女性達がかうも揃うのか。

「私それよりもっと凄いモノ聞いたのよ」

それは新一と蘭の小学校の先生の通夜の時事件は起つたという。

会場に厳粛な空気が流れ、僧侶達が読経をしていた。

二人は会場の端の方で式を呆然と眺めていた。

回りに誰もいなくてつくづく良かった、と蘭は語つた。

式も中盤に差し掛かった頃、突然前触れもなく、新一も僧侶達と一緒に読経をし始めて蘭は度胆を抜かした。

別にそのお経は一般的に知られている『般若心経』で新一が空で詠唱できる事に、彼の年令から考えると一般的ではないが、なんら不思議はない。

不思議ではないが、

問題は音の方だった。

お経と云うのは宗派やそのお寺によって多少は異なるが、大抵単音で唱えるものだ。

今の僧侶達も例に漏れず、単調で抑揚がない唱え方をしていた。

おおよそ音低など存在しないお経を唱えていた筈なのに、蘭の耳に届いたその音は

「あれ、水戸黄門のテーマに聞こえたわ」

『平成のシャーロック・ホームズ』と賞賛される高校生探偵の美声を聞いた幼馴染みの少女は遠い目をしながら語った。

『般若心経』の水戸黄門バージョンが頭の中に流れてきて、快斗はくらくらと目眩がして世界が歪んだ気がした。

「多分、本人は音が無いから大丈夫だと思って唱えたと思うけど………。手本がありながらどうしてあんな風に歌えるか理解に苦しむわ」

って蘭ちゃんが言ってたけど、素面で歌った(?) 時でも強烈な音痴が、酔っぱらったらどうなるのだろうか?

……………気になる。

さっきは人が大勢居たから被害(笑)が拡大するのを避ける為引張ってきたが、一度くらい酔った新一の歌を聞いても(どうなるか判らないが)損はしないと思う。……………多分。

今ならこの公園も人気がないし、泥酔しているから歌を促しても新一は歌ってくれそうだ。

哀の忠告を忘れた訳ではないが、

好奇心が

勝った。

「ねえ、新一。何か歌ってくれない?」

「んー? いいよー? 何がいいー?」

心の中でほくそ笑んだ快斗の耳に公園内に流れるイントロに飛びついた。

「これ! 『タイタニック』のED。新一、蘭ちゃん達と一緒にこれ見に行つたよね?」

「ああ、こつやつて両手を広げるシーンを見て園子が私もやりたいって大変だった」

そう言つて両手を広げて有線から流れる曲に合わせて詠唱し始めた。

遠くにいても、近くでも、あなたがどこにいようと信じてる、あなたの心が近づいたと

もう一度あなたは扉を開き

私の心の中に入ってきた

そして私の思いは深まるばかり

諸手を広げ、

空を抱き祈る様に、

願う様に悲しい曲に

低く寄り添う様に

奏でられる唄は

まるで

無垢な天使が

生み出す聖歌に似て

魂が　　引き寄せられる

気持ち良くに唄を紡いでいた唇が不意に閉じられた。  
現実に戻され、呆然と幻への誘い手を見つめていたら、肩が大き  
くぐらついた。

「新一!!」

自分の胸元に倒れ込んできた肩を大慌てで支えたら、ゆったりと  
した寝息が聞こえてきて力が抜けた。

「……………例のバッテリー切れだ……………」

すぐにでも家に運びたかったが、唄の余韻がまだ体に残っていて手が震えて、正直新一の体を抱え上げる自信がない。

とつても心苦しいがベンチに新一を寝かせ、回復を待つ事にした。

「君っ！」

新一をベンチに運び終えて一息入れた時、不意に肩を掴まれて快斗は振り返り身構えた。

「誰だっ！」

「ああ、良かった。その声だ。」

永年の経験から不測の事態にはポーカーフェイスが崩れ、新一曰く物騒な顔付きになってしまふ。そんな顔で振り返った先には30代位のスーツの男が満面に笑みを浮かべて立っていた。

スーツといっても服のセンスの良さからいって普通のサラリーマンじゃなさそうだな、と推測していた快斗にスツと名刺を差し出した。来た。

「僕、こういった者なんだけど、」

受け取った名刺には有名アイドルを抱える大手プロダクションの名が記されていた。

差出し主の肩書きはマネージャー。

しかも、この名は快斗でも良く聞いた事がある名だった。

ヒットメイカーの元にこの人あり、と言われた伝説的なマネージャーで、彼が手掛けたアイドルは尽くヒットしている。

そんな人が何故？と首を傾げていると、ずいっと近寄り話し掛けてきた。

「さつき君の唄を聞いたんだけど、」

なんですか？

名刺を持ったまま固まる快斗を他所に男は興奮覚めやらぬままに喋り続けた。

「色々なアイドルを育てた僕でも総毛立ったよ。ねえ、君、アイドルにならないか？そのルックスと、あの歌唱力ならカリスマアイドル間違いなしだし、君なら日本一、いいや、世界一も夢じゃな……」

息巻いて喋る男の鳩尾に快斗は力一杯膝蹴りを入れた。意識をなくして倒れる男の肩ごしから見えた快斗の瞳は、背後に真っ黒なオーラを背負ってそうなくらい据わっていた。

「てめえ……俺と新一の声を聞き違えるんじゃないやあ、業界やってけねエゼ。それに、新一の声は世界一じゃなくて……宇宙一だ。」

ここに恋人馬鹿が約一名。

\*

\*

\*

\*



前後不覚の新一をベットに寝かせ、居間のソファに座り込んだ途端ドツと疲れが出てきた。

何だか数時間前このソファで雑誌を呼んでいた平和な空間が信じられない。

数年分の寿命が縮んだ気がする。それくらいショッキングだった。新一の唄声。

あの声を聞いた直後と違って今は歌わせた事大いに悔やんでいる。周りに誰も居ないからと言って不用意に歌わせるんじゃないかった。一人だけでもあの唄声を盗み聞きをされてしまった事は、独占欲の強い快斗にとって大きな汚点だ。

「やっぱり、あいつ殺しておけば良かったかな」

「その様子だと歌ったみたいね、彼。」

入り口を見ると、哀が口元に笑みを浮かべながら扉に寄り掛かって立って。

「ドクター知っていたんだ」

新一のあの唄声を

「睨まないでよ。彼を元に戻す為にパイカルの成分を投与した時、偶然にね」

哀はふふ、と意地悪く笑う

「大人数の前で歌われたら、最大級のトラブルになりかねないと思っただから貴方に止めにいかせたのだけねど？」

「ご忠告、感謝イタシマス」

できたらもう少し具体的に忠告して欲しかった、とは後が怖いからとても言えないけれど。

「どっつ？彼の歌。」

「そうだね」

夜空と木々と大地を震撼させたあの唄声は生涯忘れる事は無いだろう。

初めて彼に逢った以上の衝撃だった。

自分ですらこうなのだから、他の人間が聞いたらどうなるか……

酔っぱらって歌を唄う新……

「凶悪すぎる」

「同感だわ」

それから、幻の唄声を求めて、夜の米花公園を妖しい男が徘徊す

るようになったとか……

(後書き)

この話のコンセプト。両手を広げて気持ち良く歌う新一。  
でも、普通の新一は絶対にやりそうになかったので酔って頂きまし  
た(笑)  
あゝ殺されても良いから天使の唄声聞いてみたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7372y/>

---

SONG

2011年11月22日01時58分発行